



パキスタン・ロシア関係の発展と限界

栗田 真広 地域研究部アジア・アフリカ研究室研究員

NIDS コメンタリー

第 85 号 2018 年 9 月 12 日

はじめに

2018 年 5 月、ロシア（旧ソ連）との外交関係樹立 70 周年の節目にあたり、パキスタン外務省は、パ露の長期的かつ多次元の戦略的パートナーシップが、両国民に利益をもたらし、かつ地域の平和と安定に寄与するであろうとする声明を発出した。

1979 年からのソ連のアフガニスタン侵攻とそれに対する代理戦争に象徴されるように、1947 年のパキスタンの独立以来、パキスタンとロシアの関係は、長らく敵対的であった。だが近年、特に 2014 年以来、急速に接近していると言われる。本稿では、そうしたパ露関係の発展の経緯を概観するとともに、その背景と、今後の展望を考察してみたい。

パ露関係の歴史

冷戦構造の中で、敵対する陣営に属していたパキスタンとロシアの関係は、一時的な接近はあれ、大半は敵対的であった。1947 年に独立したパキスタンは、1950 年代には西側陣営に加わり、東南アジア条約機構（SEATO）や中央条約機構（CENTO）といった反共同盟に加盟した。対するソ連は、1971 年の印ソ友好協力条約締結でパキスタン最大の脅威であるインドとの事実上の同盟関係に入り、同年末にインドがそのソ連の後ろ盾を背景に、第三次印パ戦争でパキスタンを敗北させ国家分断に追い込んだ。翻って、1979 年 12 月にアフガニスタンに侵攻したソ連に対し、西側諸国がアフガニスタンのイスラム武装勢力を支援してソ連と戦う代理戦争アプローチを選択すると、パキスタンは、米国やサウジアラビアから資金や物資の提供を受け、武装勢力への武器の供給や戦闘員の徴募・訓練といった、具体的な代理戦争の遂行を担った。この対ソ代理戦争

は、1980 年代末にかけ、ソ連の国力を大きく消耗させた。加えて、パキスタンは 1960 年代以来、中国と緊密な関係を築いたが、その中国とソ連の関係が中ソ対立で悪化していったことも、パキスタンとソ連の接近を困難にしていた。

こうした関係は、冷戦終結後もすぐには変わらなかった。冷戦期からの印ソの緊密な関係は印露間に引き継がれ、インドとの関係を犠牲にしてまで、パキスタンと接近する動機はロシアには乏しかった。その上、1990 年代のアフガニスタン内戦の中で、アフガン・タリバンを支援したパキスタンに対し、ロシアはイラン・インドと組んで、タリバンに敵対する北部同盟の側につき、結果として政権の座をタリバンに奪われてしまう。ロシアはそうしたアフガニスタンでのパキスタンの動きを見て、同国が潜在的に、同様の武装勢力支援を通じて、ロシアの勢力圏である中央アジア諸国の安定を脅かし得る能力を有するとの懸念を強め、さらにはパキスタンが、チェチェンやコーカサスでのテロを支援しているとして非難していた¹。

2001 年以降、これらの構図に一定の変化が訪れた。9.11 同時多発テロ事件後、米国の対テロ戦争に協力を表明したパキスタンは、アフガン・タリバンと建前上敵対するようになる。2003 年には、ムシャラフがパキスタン大統領として 1972 年以来初めて訪露、チェチェン問題をロシアの国内問題と考えること、中央アジアやロシアのイスラム武装勢力をパキスタンは何ら支援していないことを宣言、これは 2007 年に、38 年ぶりのロシア首相の訪パに繋がる。2002 年の対テロ合同作業部会を皮切りに、政府間の対話枠組みが複数設置され、2009 年にはアフガニスタン・タジキスタンを交えた 4 カ国サミットの

枠組みが立ち上がった。2011 年にはロシアがパキスタンの上海協力機構 (SCO) 加盟への支持を表明し、ザルダリ・パキスタン大統領の訪露も実現した。

しかし、2010 年前後には揺り戻しも見られた。プーチン露首相は、2010 年の訪印時に、伝統的な戦略的パートナーであるインドの懸念に配慮し、ロシアは一切の軍事的パートナーシップをパキスタンと持っていないと明言した。2012 年には、大統領に再就任したプーチンが、上述の 4 カ国首脳会合のため訪パする予定であったものの、急遽中止され、パ露関係の後退と指摘された。その背景には、この訪パが、プーチン大統領にとって就任後インドよりも先にパキスタンを訪問することになり、インドの懸念を招きかねないとの配慮があったという²。

近年の関係発展

2014 年は、こうしたパ露関係の転機になったと言われる年である。まず 6 月には、ロシアがパキスタンへの武器禁輸措置を撤回し、10 月には両国の海軍が、麻薬取締当局も交え、北アラビア海で初の麻薬密輸取締りに関する合同演習を行った。そして 11 月、ショイグ露国防相がソ連・ロシア国防相として 1969 年以来初めて訪パし、政治・軍事分野での情報交換や、国防・対テロ面での協力強化、アフガニスタン問題に関する見解共有などを含む、幅広い軍事協力合意がパ露間で締結され³、これが両国関係上の歴史的合意であると評されたのである。

翌年以降、さらに具体的な動きが続く。武器禁輸措置の撤回を受け、2015 年に Mi-171E 多目的ヘリ 2 機と Mi-35M 攻撃ヘリ 4 機の購入契約で合意、それぞれ 2016 年と 2017 年に引き渡し完了したほか、従来はパキスタンが中国経由でしか獲得できなかった、中パ共同開発の JF-17 戦闘機に用いるロシア製の RD-93 エンジンを、ロシアから直接輸入可能になった。2016 年 9～10 月には、初のパ露陸軍間での対テロ合同演習がパキスタンで実施された。インドはロシアにこの演習に参加しないよう強く働きかけたものの、ロシアは受け入れず、同様の演習は 2017 年 9～10 月にも行われた。2016 年 12 月には、パ露の外務省間で初めての地域問題に関する協議が持たれている。2018 年に入ると、軍事協

力を協議する国防次官級の合同軍事委員会 (JMCC) の設置が決定され、同年 8 月には、海軍間の協力拡大に関する覚書が締結されたほか、この JMCC の初会合で、史上初めて、ロシアの軍訓練機関でパキスタンの軍人が訓練を受けられるようにすることで合意が成立した。また、真偽が定かではないが、2018 年 4 月にパキスタン国防相がロシアのメディアに対し、パキスタンはロシアからの防空システムや T-90 戦車の調達に関心があること、今後 2、3 年で、ロシアからの Su-35 戦闘機の購入に関する合意がまとまるであろうことを述べている⁴。

経済面でも協力の動きが進んでいる。2015 年 10 月、両国はパキスタン南部の港湾都市カラチと中部ラホールを結ぶ 20 億ドル規模のガスパイプラインをロシアが建設することで合意した。露ガスプロムとパキスタンの石油ガス開発公社は、2017 年 7 月に探索・開発での協力に関する覚書に署名し、10 月にはパ露間で LNG 供給に係る政府間合意が締結され、ガスプロムがパキスタンへの LNG 供給についての交渉に入る道が開かれた。ロシアの投資によってパキスタン南部に 600MW のガス火力発電所を建設する計画に関しても、協議が行われている。

パ露接近の背景

以上の両国の接近の背景には、2010 年代のマクロな国際関係の動きがある。パキスタンとその伝統的な同盟国である米国の関係は、アフガニスタンの情勢が暗転し始めた 2006 年以降、パキスタンが建前とは異なり、米・NATO と敵対するアフガン・タリバンへの支援を続けていることに米国が不満を強め、さらに 2011 年 5 月、パキスタン国内で米国によるビン・ラディン暗殺事件が発生したことで、決定的に悪化した。その結果、オバマ政権下でも次第に米国の対パ援助は減ってきていたが⁵、トランプ政権はさらに対パ強硬姿勢を強めている。米國務省は 2018 年 1 月に、パキスタンがアフガン・タリバンなどの勢力に対して決定的な対応を取るまで対パ軍事援助の大部分を停止すると発表、さらに長らく米パ間の摩擦があれども続いてきた、パキスタンの軍人を対象とした様々な訓練プログラムを閉

鎖しつつある⁶。米国の圧力にさらされる中、パキスタンは新たなパートナーを模索する必要が生じ、そこで一つの候補としてロシアが浮上したのである。特に、パキスタン軍は先端兵器の面で米国に依存する一方、過去にも米国と問題を抱えた際に、スペアパーツも含むそれらの兵器の供与を米国に差し止められた経験があり、米国に代わる質の高い兵器の供給源としてのロシアは魅力的に映る。

ロシアの側でも、伝統的なパートナー国としてのインドが、米印原子力協定に象徴されるように、2000 年代以来次第に米国との関係を深めていたところで、その米国や欧州との関係が、2014 年のウクライナ危機を契機として悪化した。そのため、インドとの関係は維持しつつも、パートナーシップの多角化を図る必要が生じ、その一環としてパキスタンが浮上しつつある。より具体的な面で見れば、長らくロシア製の兵器に強く依存してきたインドが、米国やイスラエルなどからの兵器調達を増大させ多角化を図り、また欧米の対露制裁によってエネルギー輸出に制約が生まれる中で、ロシアは兵器・エネルギー面で新たな市場を求めており、パキスタンは候補になり得る⁷。加えて、インドと敵対するパキスタンへの関与によって、過度に米国と接近しないよう、インドを牽制する思惑もあろう。

同時に注目すべきなのが、中国の存在である。対テロ戦争をめぐる米国との摩擦の中で、パキスタンは第一義的には、1960 年代以来「疑似同盟」と称される緊密な関係を築いてきた中国に頼ってきた。その中国とロシアの関係は、近年いずれも米国との摩擦が深刻化する中で、次第に接近してきた経緯がある。そうした共通のパートナーとしての中国は、パ露の接近を促す形で作用していると考えられる。最近ではしばしば「中露パ枢軸」とも評されるようになったこれら 3 カ国は、とりわけアフガニスタン問題で協調を深めている⁸。

そのアフガニスタン問題と、これに関連したテロ対策が、現在、パ露の安全保障協力の主たる焦点となっている。両国は、アフガニスタン現体制を支える米国が、土着の反乱勢力であるアフガン・タリバ

ンに気を取られる中、より深刻な脅威であるはずのイスラム国ホラサーン州 (ISIS-K) が近年アフガニスタンで台頭しつつあることに対処できていないとの懸念を共有している⁹。パ露両国は、アフガニスタンに ISIS-K が地歩を築けば、直接的な安全保障上の脅威を感じる位置にある。パキスタン国内では、既に ISIS-K が犯行を主張するテロ攻撃が生じている。また、ロシアが勢力圏とみなす中央アジア諸国には、元から活発なイスラム武装勢力の活動が見られるため、ISIS-K がアフガニスタンで地歩を築けば、隣接するそれらの国々への進出は容易と予想され、その先にはロシア南部がある。同時にロシアは、アフガニスタンの長期的な安定化には、アフガン・タリバンとの繋がりを依然維持しているパキスタンとの協力が不可欠と見ている¹⁰。

ISIS-K に対する共通の脅威認識に基づき、パ露両国は、アフガニスタンで現に ISIS-K と戦うアフガン・タリバンへの関与で足並みを揃える。アフガン・タリバンも ISIS-K もイスラム武装勢力であることには変わりがないが、パキスタンは前者と長らく関係を築いてきたし、ロシアは、ISIS-K がアフガニスタンを越えてテロを波及させる脅威と捉える一方、アフガン・タリバンをアフガニスタンの支配のみを目指す地域的な勢力と見ている¹¹。ロシアはアフガニスタン現体制とタリバンの和平を仲介する姿勢を示し、パキスタンはこれを支持している。さらにロシアは、タリバンに武器提供を含む支援を行っていると思われる¹²。タリバンへのパキスタンの支援は長らく公然の秘密である一方、1990 年代のアフガニスタン内戦時には敵対する側にあったロシアのそうした接近は政策転換である。ロシア政府は、タリバン支援の事実は認めていないものの、タリバンへの外交的関与に賛成すること、タリバンが ISIS に忠誠を誓っていないことが重要で、ロシアとタリバンの利益が一致していること、アフガニスタンでのロシア国民の安全確保のため、タリバンと接触していることを公言している¹³。

このような姿勢は、アフガニスタンでの米国の利益と対立するが、そこにもパ露の思惑がある。元々、

パキスタンとアフガン・タリバンとの関係をめぐる米パの緊張があるところに、米トランプ政権は、アフガニスタン問題でインドの助力を求める姿勢を明確にした。しかし、アフガニスタンとも国境問題を抱えるパキスタンにとって、アフガニスタンでのインドの影響力増大は、東西から「挟み撃ち」にされる恐怖を惹起させる。ゆえにパキスタンにとって、タリバンを支援し、アフガニスタン現体制を弱める形で、同国の統治構造にタリバンを組み込んでいくことは、現体制とそれを支える米国・インドの影響力を低下させる、魅力的な選択肢である。ロシアにとっても、タリバンとの関係を梃に、現体制とタリバンとの和平を実現させられるなら、アフガニスタンでの米国の影響力を弱め、ロシアが忌避する、アフガニスタンにおける米国の軍事プレゼンスの恒久化を避ける道が開けるのである。

パ露関係の展望と限界

以上のような背景があれども、専門家の間では、パ露の接近には限界があるとの見方が強い。最大の制約要因として挙げられるのは、印露関係である。インドは特に、パ露の軍事面での協力を強い警戒感を抱き、様々なレベルでロシアに反対を伝えてきた。

パキスタンとの関係が伸長しても、それはロシアにとって、伝統的パートナーたるインドとの関係の重要性にはまだ遠く及ばない。とりわけ印露関係の最重要側面とも言える武器取引面では、2013-17年のロシアの武器輸出額でインドは依然第1位で、第2位の中国の約3倍、パキスタンの約47倍ある¹⁴。ロシアの軍産複合体は、中印の存在なしには生き残れなかったとの指摘もある¹⁵。経済規模から見て、パキスタンがインドと同規模の取引をロシアと行えるはずもない。これらを踏まえれば、ロシアにとって、対パ接近を通じて、性急に米国に接近するインドに警告のメッセージを送ることこそあれ、パキスタンとの関係を優先してインドとの関係を犠牲にすることは、合理的な選択とは言い難い。

だからこそ、2014年以前と程度の差はあれ、ロシアは今も、この点でインドへの一定の配慮を見せ

る。2018年7月の駐印ロシア大使の発言に象徴されるように、ロシアにとって最も重要なインドとの戦略的關係は、パキスタンとの関係とは等置できず、パキスタンとの安全保障協力は対テロ目的に限られるというのが、ロシアの立場である¹⁶。軍事演習は対テロ目的のものであり、かつパキスタンへのMi-35Mヘリの供与にインドが反発した際も、ロシアはこれが対テロ作戦に用いられると説明した¹⁷。

対印配慮は軍事面に限られない。中パが進める、パキスタンのグワダル港と中国・新疆ウイグル自治区のカシュガルを繋ぐ中パ経済回廊（CPEC）構想に対し、インドはこれが、パキスタンが不当に実効支配するパキスタン側カシミールでの事業を含み、主権の侵害であるとして、反発してきた。そこへ2016年末、ロシアがそのCPECに参加する、またはCPECの核たるグワダル港を利用する可能性に関する報道が出たが、ロシア政府はCPECへの参加はないと明確に否定した。ロシアはCPECの上位構想である中国の「一帯一路」への協力には積極的で、かつ今でこそインドはCPECを含む「一帯一路」全体に反対するが、当時はCPECへの反対のみを明確にしていたこと、そして前述のとおり、ロシアがパキスタンへの経済的関与自体は進めていることに鑑みれば、CPECへのロシアの姿勢の背後には、インドの不興を買うまいとの意図が透ける。

以上の点から判断するに、ロシアが望むのは、パキスタンへの接近を、対米関係を深めるインドへの牽制とはしつつも、基本的に印パ対立の構図には足を突っ込むことなく、インドとの伝統的な関係の維持と、パキスタンとの関係強化を並行させることであろう。こと武器輸出に関しては、ロシア国内には、米仏がやってきたのと同じように、インドとの関係を損ねることなくパキスタンにも武器を売ることができるという期待があるという¹⁸。

しかし実際のところ、そうした印パ対立の文脈と、印露・パ露関係を切り離そうとするロシアの試みは、パ露関係上の協力内容が深化するほどに、困難になると予想される。パキスタンは、全ての対外関係を、インドへの対抗という観点から位置づけており、今

次のロシアに先行する米中との関係構築の目的も、最終的にはここに収斂してきた。それゆえパキスタン、ロシアの思惑とは逆に、パ露接近を対印戦略上の梃にしたいと考えているし、実態がどうあれ、「ロシアが旧来のパートナーであるインドを捨ててパキスタンについた」ものとして描き出すことに利益を見出す。それで実際に印露関係が疎遠になる方が、パキスタンには好都合なのである。

実はこの種の構図を、中パとインドの間で現に見出すことができる。中国は確かに、ともにインドとの国境問題を抱えるパキスタンと、50 年超に及ぶ戦略的な関係を築いてきたが、今日、習近平政権が対外政策の柱と位置づける「一帯一路」とその下にある CPEC に関しては、これらの事業を経済的に成功させるべく、インドとの協力を望み、同国に秋波を送ってきた。だがパキスタン、特に安定保障政策を牛耳る陸軍には、CPEC を中パの伝統的な戦略的関係の延長と捉え、CPEC を通じて中国にとってのパキスタンの重要性を増大させることで、中国の後ろ盾を強化し対印戦略上の梃にしたいとの思惑があり、パキスタン国内では、こうした CPEC の戦略的意義に関する言説が溢れている。対するインドの反応はと言えば、パキスタンの思惑に沿う形で、CPEC を中パの対印封じ込めの一環と捉え、同構想とその上位にある「一帯一路」への反発を強めてきた。結果として、2017 年 8 月に中印間のドクラム危機が収束して以降、中国は対印関係上のダメージコントロールに追い込まれている節がある。

ロシアにとって、パキスタンが試みる、このような屈折した「同盟管理」に対処しつつ、インドとの関係維持のバランスを取りながら、さらにパ露関係を深化させていくことは、相当に困難な舵取りになるだろう。特に、T90 戦車や Su-35 戦闘機といった、「パキスタンの対テロ能力向上」では片づけられない、印パ間の通常戦力バランスに影響を及ぼし得る兵器の供与に踏み出すとなれば、尚更である。

加えて、その対テロやアフガニスタン問題といった、一見印パ対立と切り離し可能に見える問題領域でさえ、パキスタンはそうは見えていない。パキスタ

ン国内では、ISIS-K を支援しアフガニスタン経由でパキスタン国内においてテロを起こさせ、パキスタンを不安定化させようとしているのは、インドの対外情報機関である研究分析局 (RAW) であるとの言説が広く受け入れられている¹⁹。だがインドのパートナーとして、ロシアはこれを共有しないだろう。この点自体が、ISIS-K 対処におけるパ露協力を深刻に阻害することはないと思われるものの、そこから予期されるのは、いずれアフガニスタン問題の焦点が、目先の安定化から同国の長期的将来に移ったとき、パラノイア的にアフガニスタンでのインドの影響力を排除しようとするパキスタンと、パートナー国としてインドの一定の役割を認めるロシアの間に、齟齬が生じる展開である。ロシアは明らかに、インドをアフガニスタンの将来に関するステークホルダーと捉えている。ロシアはイランも巻き込む形でインドと協力し、イランからアフガニスタンを通り中央アジアやロシアに至る国際南北輸送回廊 (INSTC) 構想を推し進め、2018 年 5 月の印露首脳会談ではアフガニスタンにおけるインドとの共同事業で合意し、アフガニスタン問題に関するハイレベル協議をインドと実施するといった動きを見せているのである。

2000 年代、インドの台頭と対テロ戦争でのパキスタンとの協力という文脈の中で、米国は印パそれぞれとの関係を切り離して強化しようとし、失敗した。現在、「一帯一路」を進めていく上で、経済面を中心としたインドとの関係の維持・改善と、伝統的パートナーのパキスタンとの協力を切り離して進めようとしているのは中国であるが、これも奏功しているとは言い難い。これら米中の経験に鑑みると、文脈が異なるため単純なアナロジーは適切ではないにせよ、同様の印パそれぞれとの関係の切り離しに、ロシアが成功すると考えるに足る根拠は見当たらない。付言すれば、長らくパキスタンのパートナーであった米中とは異なり、ロシアは対パ関係の管理に関する経験をほとんど持たないし、伝統的にインドのパートナーであり続けてきたがために、対パ協力の深化に当たってより強いインドの反発

を招くことも予想される。

そして、これらの困難に直面したロシアが、仮に今後、パキスタンとのさらなる関係深化に躊躇する場合、それを乗り越えられるだけの努力がパキスタン側から出てくるのかは疑わしい。パキスタンにとって、現在の、ISIS-K 対処とアフガニスタン安定化を念頭に置いた協力を越える対露関係強化は、有益ではあるが必須ではない。伝統的な同盟国ながら関係が悪化している米国を度外視しても、パキスタンにとってまず重要なのは中国で、サウジアラビ

アを中心とした湾岸諸国が続くのである。

近年のパ露関係の接近は、ある意味「何も無い」ところからスタートしたからこそ、急速に進展してきた面は否めない。勿論、そうした中で達成されてきた協力は今後も続くだろう。しかし、それが今後、対テロ・アフガニスタン問題と、米印接近への「当てつけ」を越えた、戦略的パートナーシップになるには、まだ多くのハードルが残っていると言えよう。

(2018 年 9 月 5 日脱稿)

¹ Tahir Amin, "Pakistan-Russia Relations and the Unfolding "New Great Game" in South Asia," in Helena Rytövuori-Apunen, ed., *The Regional Security Puzzle around Afghanistan: Bordering Practices in Central Asia and Beyond*, B. Budrich, 2016, pp. 197-198.

² Vladimir Moskalenko and Petr Topychkanov, *Russia and Pakistan: Shared Challenges and Common Opportunities*, Carnegie Moscow Center, May 2014, p. 11.

³ Rajorshi Roy, "Russia's Military Cooperation Agreement with Pakistan: An Assessment," *IDSA Comment*, December 15, 2014.

⁴ "Pakistan in Talks with Russia on Buying Air Defense Systems: Defense Minister," *Sputnik*, April 6, 2018.

⁵ "Donald Trump Cuts Pakistan's Security Aid: US Has Already Slashed Funds by 62% in 5 Years as US Sees Red over 'Safe Terror Havens'," *FirstPost*, January 5, 2018.

⁶ Umair Jamal, "The Consequences of Shifting US-Pakistan Military Ties," *The Diplomat*, August 18, 2018.

⁷ Uma Purushothaman, "The Russia-Pakistan Rapprochement: Should India Worry?," *ORF Issue Brief*, No. 117, November 2015, p. 3.

⁸ "Pakistan, Russia and China Inch Closer to Formal Alliance," *The Express Tribune*, April 3,

2017.

⁹ Jamal, "The Consequences of Shifting US-Pakistan Military Ties."

¹⁰ Purushothaman, "The Russia-Pakistan Rapprochement," p. 3.

¹¹ Vinay Kaura, "Russia and Pakistan Align their Afghanistan Policies," Middle East Institute, March 8, 2018.

¹² "Russia 'Arming the Afghan Taliban', Says US," *BBC*, March 23, 2018.

¹³ Kaura, "Russia and Pakistan Align their Afghanistan Policies."

¹⁴ SIPRI Arms Transfers Database に基づく。

¹⁵ "Russia to Punish India with Pakistan's Help for Failing 5th-Generation Fighter Project," *Pravada*, March 8, 2018.

¹⁶ "Russia's Ties with Pakistan and India Cannot be "Equalised": Russian Ambassador," *The Economic Times*, July 12, 2018.

¹⁷ Purushothaman, "The Russia-Pakistan Rapprochement," p. 2.

¹⁸ Moskalenko and Topychkanov, *Russia and Pakistan*, p. 10.

¹⁹ 例えば、"RAW, Daesh Working to Damage Pak Sovereignty: Rehman," *The News*, August 13, 2018.

プロフィール

profile

地域研究部

アジア・アフリカ研究室

研究員 栗田 真広

専門分野：核戦略、抑止理論、
南アジアの安全保障

本欄における見解は、防衛研究所を代表するものではありません。

NIDS コメンタリーに関する御意見、御質問等は下記へお寄せ下さい。
ただし記事の無断転載・複製はお断りします。

防衛研究所企画部企画調整課

直 通：03-3260-3011

代 表：03-3268-3111 (内線 29171)

FAX：03-3260-3034

※ 防衛研究所ウェブサイト：<http://www.nids.mod.go.jp/>